Web 用

カンボジア食品・栄養現地ビジネス視察プログラム

報告書

2017 年 1 月 15 日～20 日

JICA　人間開発部

目次

1. プログラムの目的と背景
2. 主催者
3. 日程
4. 参加者リスト
5. 訪問先概要報告
6. 総括
7. 写真

１．プログラムの目的と背景

「栄養改善事業推進プラットフォーム(Nutrition Japan Public Private Platform）」（以下、NJPPP）は、食品関連事業等に取り組む日本の民間企業が、その経験と技術を生かして、開発途上地域の人々の栄養改善効果が期待できる、食と栄養に関する事業を実施できるように環境整備を支援するとともに、ビジネスモデルを構築すること等を目的として、官民連携の枠組みとして2016年9月発足した。

本カンボジアビジネス視察プログラムは、NJPPPの活動の一環として、カンボジアの首都プノンペンや近郊の経済特区の企業訪問などを通して、将来的に日本企業の食品等のカンボジアでのビジネス展開に繋がる可能性を検討していただくことを目的として２０１７年１月１６～２０日に実施された。

日本の食品産業等のNJPPP参加企業が、現地に進出している日本企業（プノンペン郊外の経済特区等）やカンボジア企業等を訪問し、ビジネス交流会を実施することにより、日本企業やカンボジア企業に対する食品・栄養の分野でのビジネス機会の創出可能性を検討し、特に現地企業の従業員に対する栄養改善事業（職場の栄養食プログラム）を、PF参加企業と連携して立ち上げる（給食の栄養改善、女性従業員への栄養教育や栄養食品等の提供などがアイデア）可能性を検討した。

現地では、カンボジアでのビジネス展開へのアドバイスに実績のあるカンボジア日本人材開発センター（Cambodia-Japan Cooperation Center, 以下CJCC）やカンボジア日本人商工会との意見交換、栄養プロジェクトの現場視察等、現場の様子を深く理解していただける内容となった。

２．主催者

栄養改善事業推進プラットフォーム（NJPPP）
独立行政法人国際協力機構（JICA）
一般財団法人食品産業センター

３． 日程

年月	時間			プログラム内容
1 月 15 日				NH817 成田発 10:50→プノンペン着 15:40
1 月 16 日	10:00	～	12:00	オリエンテーション、ビジネス環境説明
	14:00	～	15:00	カンボジア企業等訪問
	15:30		16:30	日系企業等訪問
	18:00	～		現地で活動する日本人専門家との夕食会
1 月 17 日	9:30	～	12:00	国立小児病院訪問
	15:30	～	17:00	国立母子保健センター、栄養国家プログラム訪問
	18:30			夕食会（JICA カンボジア所長）
1 月 18 日	10:00	～	12:00	カンボジア企業等訪問
	9:00		11:00	カンボジア省庁訪問
	14:00	～	17:15	栄養セミナー
	17:15	～	18:00	ビジネス交流会
1 月 19 日	9:00	～	10:00	JETRO カンボジア事務所訪問
	10:45	～	11:45	プノンペン経済特区管理者との面談
	14:00	～	15:00	プノンペン経済特区内日本企業訪問
	15:30	～	16:30	プノンペン経済特区内日本企業訪問
1 月 20 日	10:00	～	12:00	ローカルマーケット視察
	14:00	～	15:00	在カンボジア日本国大使館訪問
				NH818 プノンペン発 22:50→成田着 6:30（翌 1 月 21 日）

４．参加者

■参加者

氏名	所属
中村　丁次先生	神奈川県立保健福祉大学学長
小松　恵徳	株式会社 明治　本社生産本部技術部
金廣 純子	アイ･シー･ネット株式会社
山崎 三佳代	アイ･シー･ネット株式会社
池田 尚子	アイ･シー･ネット株式会社
中村 英誉	一般社団法人ソーシャルコンパス
貝塚 乃梨子	一般社団法人ソーシャルコンパス
Jessy An	一般社団法人ソーシャルコンパス

■主催者

吉田　友哉	JICA 人間開発部第 3 チーム課長
高橋　優子	JICA 人間開発部第 3 チーム

■オブザーバー

岡島 洋之	内閣官房健康･医療戦略室　参事官
大屋　洋子	農林水産省食料産業局企画課 企画官

５．訪問先概要報告

（１）政府関連機関

カンボジア開発評議会（CDC: Council for the Development of Cambodia）

同国内の経済特区に進出する企業への支援についてお話を伺った。

CDC外観

カンボジア農業・農村開発評議会

SUN や他ドナーの動向、カンボジアが抱える栄養課題についてお話を伺った。

MAFFにて

国立母子保健センター／国家栄養プログラム

カンボジアの栄養状況は改善傾向にあるが、生殖年齢にある女性や妊産婦、子どもの栄養課題はまだ改善の余地があること、栄養の５か年国家戦略「Fast Track Road Map for Improving Nutrition 2014-2010」の内容等についてお話を伺った。

集合写真

病院のキッチン

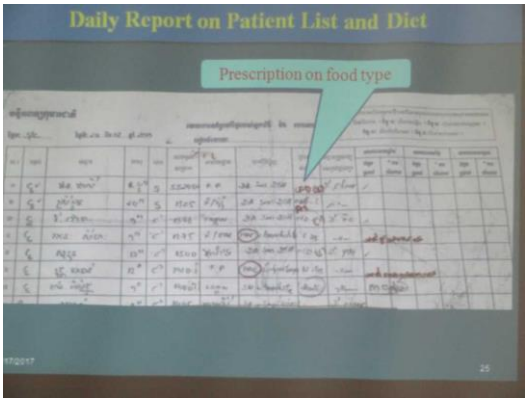
研修教材（胎児モデル）

研修教材（妊娠期）

国立小児病院

2007 年から公益財団法人 国際開発救援財団 FIDR の支援で、病院キッチンを整備し、1 日 3 回病院食を提供している。病院職員からは栄養課の活動、病院食のプロトコルについて、FIDR からは子どもの栄養状況調査についてお話を伺い、キッチンの見学を行った。

外観



説明資料（病院食の処方）

病院食処方のプロトコル

患者教育ポスター（三大栄養素）

アンコールワットをイメージしたフードピラミッド

栄養課

栄養課の様子

栄養課見学の様子

栄養課のスタッフとの集合写真

CJCC（Cambodia-Japan Cooperation Center）カンボジア人材開発センター

カンボジアの国概況、ビジネス環境、CJCC の活動についてお話を伺った。

外観

概要説明

吹き抜け

ビジネス関連資料

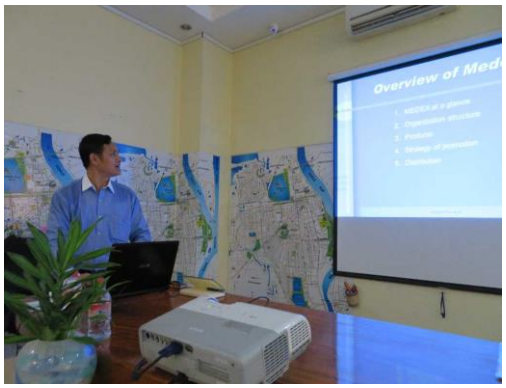
中庭の食堂

大ホール

（２）企業

現地企業（医療機材輸出入）

カンボジア人の健康意識とマーケティング戦略、顧客管理方法等についてお話を伺った。



概要説明

顧客管理の地図

概要説明

集合写真

現地企業（製菓）

微量栄養素強化スナックの製造・販売に関する工夫や課題についてお話を伺った。

微量栄養素強化スナック

集合写真

日系企業（小売）

カンボジア人の食文化や消費行動、それに併せたマーケティング戦略、売場の動向などについてお話を伺い、食品売り場の見学を行った。

集合写真

売場（食用虫の販売）

フードコート

圧倒的な売上を誇るサーモン

認証オーガニック野菜を取り扱う

牛乳は贅沢品

試食販売

自家製パン売り場

Phnom Penh SEZ Plc.

プノンペン経済特別区(PPSEZ)の概況及び管理体制、進出企業などについてお話を伺った。

経済特区入口

管理事務所外観

会議室

集合写真

経済特区内日系企業（精密機械部品）

１回 1200 人を収容できる社員食堂や福利厚生について説明を頂き、実際に生産工程と社員食堂の見学を行った。

集合写真

外観

経済特区内日系企業（製造）

カンボジア人従業員リクルートの課題、生産性を上げるための工夫、インセンティブなどについてお話を伺った。

写真食堂

朝食を無償提供している（整列用指示）

集合写真

従業員の帰宅風景

Kurata Pepper

倉田氏が１９９７年より栽培を開始した胡椒を販売している Kurata Pepper を訪問し、店内作業場における胡椒の選定の様子、胡椒販売場、商品などを見学した。

従業員の様子

売場商品

ローカル市場

プノンペン最大のローカル市場でありセントラルマーケットの特に食品売り場（魚介類売り場、生鮮品）を中心に視察を行った。

ドーム型のマーケット

外観

野菜売り場と靴売り場が近接

マーケット内にトイレがある

肉売り場

魚売り場

干物も多く売られている

屋台

（３）日本政府関係機関

JETRO Phnom Penh

カンボジアの経済、貿易、投資環境と進出日系企業などについてお話を伺った。

在カンボジア日本大使館

堀之内大使に栄養改善事業推進プラットフォーム及び本プログラムの概要について報告した。

６．栄養セミナー

神奈川県立保健福祉大学の中村丁次学長より基調講演を頂き、参加企業・団体の自社紹介を行った。本セミナーには、日系企業、ローカル企業、カンボジア政府関係から 55 名の参加があった。

時間			プログラム	演者
14:00	～	14:10	開会挨拶	安達一 （JICAカンボジア事務所長）
14:10	～	14:25	日本における栄養改善の取組と海外への協力	大屋洋子企画官 （農林水産省食料産業局企画課）
14:25	～	14:40	栄養改善事業推進プラットフォームとアジア諸国との協力	岡島洋之参事官 （内閣官房健康・医療戦略室）
14:40	～	16:10	講演「日本の栄養政策と産業界の役割」	中村丁次先生 （神奈川県立保健福祉大学学長）
16:10	～	16:30	カンボジアの栄養課題	カンボジア保健省栄養国家プログラム
16:30	～	16:40	休憩	
16:40	～	16:50	自社紹介	株式会社 明治
16:50	～	17:00	自社紹介	アイ・シー・ネット株式会社
17:00	～	17:10	自社紹介	一般社団法人ソーシャルコンパス
17:10	～	17:15	閉会挨拶	CJCC所長
17:15	～	18:00	ビジネス交流会	

会場風景

岡島洋之氏（内閣官房健康・医療戦略室参事官）

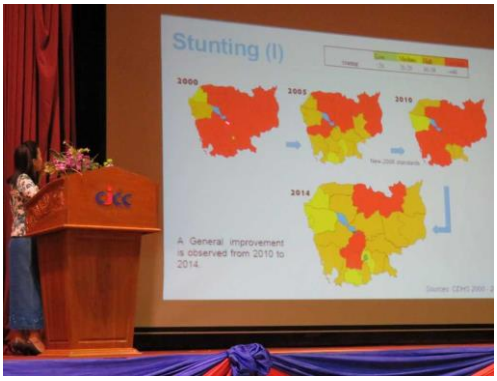
大屋洋子氏（農林水産省食料産業局企画課企画官）

中村丁次先生（神奈川県立保健福祉大学学長）

小松恵徳氏（株式会社 明治）

山崎三佳代氏、金廣純子（アイ・シー・ネット株式会社）

中村英誉氏（一般社団法人ソーシャルコンパス）



カンボジア国家栄養プログラムからの報告

CJCC 所長からの辞

集合写真

７．講評

「栄養改善事業推進プラットホーム（Nutrition Japan Public Platform: NJPPP）」に参加して

神奈川県立保健福祉大学学長　中　村　丁　次

１、カンボジアの栄養問題

２０１７年、１月の１５日～２０日、国際協力機構（ＪＩＣＡ）が主催する「栄養改善事業推進プラットホーム（Nutrition Japan Public Platform: NJPPP）」の一環として開催された、カンボジアビジネス視察プログラムに参加させていただいた。カンボジアでも、他のアジア地域と同様に、急速な経済成長により富裕層では食事が豊かになったが、貧困層では低栄養が放置されたままの状態であった。つまり、食生活の急激な変化により、やせ・貧血と肥満・糖尿病が混在した栄養障害の二重付加状態にあり、国民に多様な栄養問題が顕在化しつつあった。しかし、科学的エビデンスに基づいた総合的な栄養政策が実施されていな現状が理解できた。

首都プノンペンで進められている経済特区では、日本企業が進出し、現地の多くの若者がワーカーとして働いていた。ワーカーは貧しい地方から出てきた若者が多く、低栄養のために体力がなく、立ち仕事が続くと倒れ、無断欠勤する者も多く見られるとの報告を聞いた。現地の医師から鉄欠乏性貧血と診断されたが、彼女たちは食事を改善する意識も、知識もなく、貧血予防に有効な鉄、たんぱく質、ビタミン 2、ビタミンＢ12, 葉酸、ビタミンＣ等を多く含む食事をとる機会も少ない。現地の支配人は、進出当初、ワーカーさん達から「私達がこのように倒れるのは現地の社長さんが、神様にお祈りしないからだ」と訴えられ、神棚を作ったとのエピソードを話してくれた。会社は、食事改善の必要性を感じて、ワーカーに食費を支給したが、故郷への仕送りを目的に欠食する者が多く、解決にはならなかったそうである。国民に栄養と言う概念が理解されておらず、食生活を改善する必要性も、方法もわからず、神頼み状態になっていたのである。

このような状態は、発展途上国に多く見られる現象であり、日常の食事は生きていく上で必須で、食べる事の意義は認識しているが、栄養の知識が無いために、個々の健康状態を改善する具体的方法が解らないのである。一方、発展途上国の政府やリーダーからは、「経済が発展して国民の収入が増えれば、食事は豊かになり栄養問題は自然に解決される」という話をよく聞く。プノンペンでも、経済発展により街並みにはおしゃれなカフェーやレストランが増えつつあり、日本からの巨大なショッピングセンターが進出し、並んでいる食品は日本や欧米の状況と変わらない。

しかし、栄養政策がない経済発展は、高栄養の欧米食の導入により、一時的には栄養状態が改善するが、問題が低栄養から過剰栄養にすり替わるだけで、国民の健康状態や生産性を向上させる解決にはならない。過剰栄養の問題が起これば、肥満と生活習慣病が増大し、国民の健康状態や労働生産性は低下し、医療費が増大し、より大きな

社会問題を起こす結果になる。しかも、過剰栄養問題は、いずれは富裕層のみだけではなく、低所得者層や低学歴層にまで広がり、問題をさらに深刻化させる。一方、豊かになった先進国でも、若年女子や高齢者には低栄養が存在し、結局、経済の発展が栄養問題を解決するカギにはならない。現在のカンボジアは、このようなことが現実化する分岐点にある。

２、対策

カンボジアは早急に栄養政策に取り組む必要がある。つまり、多少の経済的負担をしたとしても、栄養を配慮した質の高い食事や食品をとる取ることが、ワーカー自分の栄養状態、健康状態を向上させ、引いては労働効率も良くなり生産性が向上し、会社や社会としてもベネフィットが高くなることを認識し、国家、地域、職場、家庭を上げて、栄養改善に取り組む必要がある。
わが国では、明治維新以降、あらゆる生活を近代化し、欧米の食事を積極的に取り入れ、肉、牛乳、乳製品の摂取を増やすことを政府が薦めた。しかし、栄養学を基本に本格的な栄養改善に取り組んだのは第二次世界大戦以後である。栄養改善は、戦後の食糧不足による低栄養と、その後に起きた高度経済成長を支える労働者の体力を強化する重要課題であった。１９５２年に「栄養改善法」が制定され、それに基づく各種の政策が実行され、学問的には「労働栄養学」の分野が発展した。産業界では、各会社が栄養士を雇用し、食堂には栄養価の高いメニューが提供され、職員の厚生福利の一部として食堂が運営された。また、栄養士による栄養の知識の普及が日常的に行われ、種々のイベントが開催された。日本人は、子供の時には学校給食で、仕事場では職員食堂で栄養バランスの良い食事を実際に喫食し、栄養の知識の修得と同時に実際の食体験の両面から栄養改善を実施したのである。このような、徹底した栄養改善運動は、戦後の低栄養問題を短期間に、しかも平等に解決したのみならず、高度経済成長後の過剰栄養の問題解決の一助にもなった。つまり、日本では、食事の欧米化が、副菜を国際色豊かにして低栄養を解決する手段となり、高カロリー・高脂肪食の弊害が顕著化するほどの欧米食にはならなかった。結果的には、低栄養の従来の食事に、高栄養の欧米食が適度にミックスされて、栄養バランスの優れた日本食を形成することができたのである。そして、このことが、日本人が長寿を維持している要因にもなっている。このような日本の優れた栄養への取り組みは、カンボジアはもちろん、広く世界のモデルになる。
カンボジアでの栄養改善に関する今後の具体的な取り組みについては、下記の内容の検討が必要になる。
１）正確の栄養調査を行い、取り組むべき栄養問題を明確にする。
２）栄養改善の目標を設定する。
３）食品、給食、さらに栄養教育の面から改善計画を作成する。
３）改善計画に基づき実施する。（業務改善の一部か、介入研究か）

４）一定期間実施し、その評価を行う。
５）栄養改善の成果を広報し、多施設、他地域への普及を図る。
検討すべき点
栄養改善の対象、栄養調査法、改善方法、評価方法には、いくつかの方法があり、予算規模、人材、企業の協力等の要因を考慮し、柔軟に対応する。また、単なる業務改善としての事例報告にするのか、研究レベルまで高めて論文発表までするのかは、プロジェクト全体の検討が必要となる。ビジネス化に関しては、１）～５）のそれぞれの段階で、ソフトとハードに関する広範囲なビジネスが発生する。

８．総括

本プログラムは、栄養改善事業展開プラットフォーム発足後、会員企業の参加を募って実施した最初の事業の一つであり、視察先の設定など手探りで進めてきたが、カンボジア人材開発センターによる調整もあり、無事に実施することができた。

初回であることから、参加企業数については最小催行設定としていた３社・団体となったが、それぞれの所感からはおおむね好評であったことがうかがえる。

またカンボジア国内で実施した栄養セミナーについても、カンボジア政府、企業等の参加を得て盛況のうちに開催することができた。中村丁次先生による講演で、日本の栄養を巡る状況も含めた、栄養学の重要性について関係者に周知できたことも成果の一つであった。

本プログラムの特徴として、栄養改善事業展開プラットフォームの予算を活用し、JICA 現地事務所そして JICA 及びカンボジア関係企業と良好な関係を築いているカンボジア人材開発センターのネットワークを駆使したことによって、カンボジア政府による栄養政策についてのインプット、小児病院、母子病院等によるカンボジア国内の栄養の課題とその対応に関する共有、栄養に関心のある各種の企業への訪問など、官民バランスのとれた視察先を確保できたことがあげられる。

本プログラムのフォローアップとしては、参加企業から挙げられている提案に関し、将来実現できるようプラットフォームとしても支援し、具体的な実績を積み上げていくことが重要である。

また CJCC は、今回のプログラムにより日系進出企業及びカンボジア国内の民間企業とのネットワークが強固であることが明らかとなった。今後、本プラットフォームとして何らかの協力体制を築くことは、本プラットフォームを通じてカンボジアに進出を検討している日本企業にとっても有益であると考えられる。

プログラムの企画・運営に関しては、参加者から今後の改善に関してのフィードバックを得ているところ、次年度以降の開催の際の参考とし、一層充実したプログラムとしたい。

最後に、ご多忙な中、全行程を通じてご参加いただいた中村丁次先生には、セミナーでのご講演のみならず、参加者、現地関係者に有益なアドバイスをいただくことができ、プログラムの充実にご助力いただけたことに感謝申し上げたい。引き続き中村先生にプラットフォームへのご助言をいただければプラットフォームのさらなる発展につながると考える。